



過去の自分に出会う体験

六つになった

アラン・アレクサンダー・ミラン

一つときは

なにもかもはじめてだった

二つときは

ぼくは まるっきり しんまいだった

三つときは

ぼくは やっと ぼくになった

四つときは

ぼくは おおきくなりたかった

五つときは

なにかうなにまで おもしろかった

いまは六つで

ぼくは ありったけ おりこうです

だから いつまでも

六つでいたいと ぼくは思います

(周郷 博 「母と子の詩集」より)

この詩を書いたアラン・アレクサンダー・ミランはイギリスの作家で、誰もが知っている「クマのプーさん」の作者でもあります。原詩の題名は「Now we are six」(今、ぼくは6歳)。

実は、中学3年生の家庭科の教科書に載っている詩です。本校では、3年生の家庭科の授業時間に、隣接する「ククルなかよし保育園」にお願いして、保育園児とのふれあい体験をさせていただいています。今週の水曜日の3年7組を最後に、3年生全員の体験が終了しました。

保育園の子供たちと間近で接している時、彼らは実にいい顔をしています。もしかすると、過去の自分自身を投影して見ているのかもしれませんが、自分も小さいときこんなふうは無邪気に周りに話しかけて、一生懸命に遊んで、大人に甘えて愛情を受けながら育ってきた、という記憶の追体験にもなっているのでしょう。

上の詩は子供の発達段階をよくあらわしていて、3才頃の自我の芽生え、4才頃の大きな子への憧れ、そして5才では毎日が楽しくて、6才では自信に満ちあふれています。ちなみに、アニメのクレヨンしんちゃんは「毎日が楽しくて仕方ない最強の5才児」だそうです。

ありったけおりこうで、いつまでも六つでいたい、と胸を張っていたのに、中学生となった今とはともすると「自分なんか…」という自己否定の方向へ思考が傾いていきがちなこともあるかもしれません。また、深い考えもなしに親や友人に心ない言葉を投げかけてしまって後悔することもあるかもしれません。

しかし、自分が愛されて成長してきた、という実感は、まぎれもなく自分自身の存在そのものを肯定することであり、同時に他者を容認する気持ちを持たせてくれるものです。何よりも、男子も女子も普段の学校生活では見られないような優しい表情になることがそれを物語っていました。中学生の時期に小さな子供とふれあうということは、過去の自分に直接接触することであり、思春期の中学生にこそこの体験をさせたいと考えています。ククルなかよし保育園の皆様、そして園児のみなさん、本当にありがとうございました。

